

広島俳句倶楽部

令和四年九月作品集

琵琶湖の夏 高尾ひとみ

この夏、琵琶湖の湖西から湖北を訪ねました。
稲は青々と伸び、夏草は茂り、風が吹き、鶯がよく鳴いていました。人は、そうした自然の中で暮らし、柔らかに語ります。

草も木も鳥も魚も、琵琶湖には前からあったものが今もずっと残っています。こうしたところにいるときの気持ちを、心が落ち着くと言うのでしょうか。

そんな心でここに居ると、不思議と匂が生まれます。そんな琵琶湖にまた行きたくなってきました。

母の背に隠れて築を子が覗く

幾たびも鳶の降りては鮎掴む

涼しさよ夕べの浜に腰おろし

花木僅夜の湖の波の寄せ

菅浦の夏の盛りの家並かな

湖へ歩けば過ぎり夏の蝶

菅浦に釣る少年や雲の峰

泳ぎ子に時をり鳶の鳴きにけり

雷雨去り波止を出てゆく船二艘

コスモスに波音高き琵琶湖かな

《作品鑑賞》

暁子

琵琶湖は日本の歴史や文化と深い関りがあり、また、自然の壮大さと言うまでもありません。そんな湖の夏の盛りを詠まれています。

母の背に隠れて築を子が覗く

幾度も鳶の降りては鮎掴む

湖の築漁はどんなものでしょうか。恐る恐る母の後ろから覗く幼子や、その鮎目がけて急降下する鳶、滅多に見られない景色に感動する作者を想像するに難くありません。

菅浦の夏の盛りの家並かな

菅浦に釣る少年や雲の峰

「菅浦」の地名が生きています。湖と山の狭間の家並みは何時代のものでしょう。峰雲が映る湖に竿垂れる少年の健やかな姿も目に浮かびます。少年には夏が似合います。

高島幼稚園

村上正人

私が五十五年前入園した福山市立の幼稚園である。県道二十二号線を福山駅方面から鞆の浦へ向かうと、海岸に沿う手前の田尻町に園舎はある。近辺については昭和初期まで、神武東征伝承上の吉備高島宮比定地のひとつであった(のちの昭和十三年に当宮は現岡山市南区宮浦と定められた)。また、初代福山藩主水野勝成が島原の乱鎮圧のため軍船「大転輪丸」を建造し、約六千の軍勢で出帆したのが今は園庭となっている場所だったという。恥ずかしながいずれも最近になって知った。久しぶりに訪れると、かつて園長先生がカブトガニを見つけて我々に見せてくれた浜や、当時はとても高い山の上と感じた八幡神社がなつかしい。ただ園児減少のため三年前より休園し、以来、園舎は地域交流に使用されているとのことだ。

白木槿明け方の雨留めけり

浜辺へと駆けてゆく子の素足かな

園児るぬ園庭広し夏の昼

園庭の遊具に夏の日差かな

老鶯の声を聞きつつ坂上る

緑蔭を探し見てるる鞆の浦

園舎へと下る坂道草いきれ

あきあかね園舎の屋根を巡りをり

いくつもの水輪をつくり目高かな

夏の日の船入跡の暮れにけり

《作品鑑賞》

あざみ

夏の早朝、かつて学ばれた幼稚園を約五十年振りに訪ねられた。作者が学んだ時期、日本は高度経済成長期であり、生活も豊かで、街は活気に溢れ、子供も多い由緒ある幼稚園だった。その幼稚園は休園となり、現在は地域の交流の場になっている。今の光景に加え、かつては何気なく見過ごしていたものにも淋しさが想像される。

白木槿明け方の雨留めけり

白木槿は一日花。この句にも何か微妙な気配を感じた。

園児るぬ園庭広し夏の昼

かつて園児でいっぱいだった頃を回想する。当時の温かさ、今、ご自分の淋しさを秘めながら、最新の注意を払いつつ、次の句へとつないでいる。

あきあかね園舎の屋根を巡りをり

次の句への組み合わせ、関係性も新鮮である。どの言葉の中にもご自分の位置がはっきり見え、言葉にはさまさまな表情が隠れている。

夏の日の船入跡の暮れにけり

今、目の前の海に夕日が沈もうとしている。かつての船入跡。昔を偲びながら涼風が立ちはじめている。少子化とコロナ禍の波は幼稚園にも押し寄せており、本人の喪失の実感が読みとれ、最後を上手に締め括られた作品である。

どこからか風鈴の鳴る大路かな

一本の夏木の前で曲りけり

歩き終へ山陽道の涼しさよ

大西日受けてひと日の終りけり

夾竹桃人の生死に散りにけり

柿の木にこれが最後と鳴く蟬か

一川の風に吹かるる盆の入り

秋の蝶もつれにもつれ神の前

鶏頭にすぐ止む雨の降りにけり

秋霖の雲が鬼ノ城隠しけり

まだ明けぬ空を稲妻走りけり

新涼や明けの鴉の声のして

早朝の田より匂へり稲の花

足元に散らす落花や百日紅

萩の花通りの風に咲き初むる

昼の虫井戸の方から聞こえをり

藪蘭の風に任せて揺れてをり

手を上げて子の渡る道鶏頭花

蜻蛉の屋根越ゆるまで見てゐたる

音のせぬ遙か遠くの花火かな

山水に祖母の冷やせる甜瓜

雨止んで夏曉の空広がりに

用済ませ川端に聞く法師蟬

草踏んで燈籠流し見に行きぬ

燈籠を流してゐたる人の声

髪梳いて秋の初風吹きにけり

虫の音のかそけきに耳澄ましをり

更くる夜の月を見上げて帰りけり

降る雨の音に紛れず虫の声

夜の雨やんで虫の音しきりなり

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

立ち止まりしばらく眺め夏水仙

朝風に微かに揺れて夏水仙

高砂百合五つ六つと咲きにけり

一頻り鳴いてまた鳴きつくつくし

塀を越え朝顔の花咲きにけり

白と赤の朝顔咲くや前庭に

朝風に微かに揺るる牽牛花

手を伸ばし枝を引き寄せ青棗

青棗一枝手折り壺に挿す

房生りの棗が道に垂れたり

秋沙

白雲が生き物に見え日の盛

一本が底に届き夏の草

一音に鳩飛び立てり雲の峰

背伸びして柵の葉に触る片かげり

教会の縦長の窓晚夏光

夏の果レコードで聞くレクイエム

蓄音機のぜんまいの音夕涼し

柔かきピアノの音色秋の薔薇

園児等のリレー教はる秋日和

児童館のにぎやかな声鰯雲

亜矢

雨止んで聞こえてきたり虫時雨

秋めくやチンチン電車過ぐる音

初嵐石見の風車唸りけり

大山に牛の放たれ秋うらら

山霧や神話の国になほも濃く

水澄むや縄文杉の埋もるる地

秋草の日日匂ふ通勤路

秋草に沈んでゐたり眠り猫

満月が放影研を照らしたり

街灯の一路秋風通りけり

綾乃

百日紅咲かせる家の並びたる

生垣の青はほづきに触れてゆく

凌霄の落花の道の華やげる

松原をサーフボートを担ぎ行く

島々を近くに置いて夏遊きぬ

御座船は小屋に納まり浜の秋

鰯飛ぶや島の浜辺の日の高く

日の差せる船渠の跡地つくつくし

涼新た遙かな峰を思ひをり

やや暗き庭の本立や秋の風

せがまれてまた広げたるプールかな

新涼や朝一番に景書出し

新涼や馴染みの顔とすれ違ふ

鶏頭の一輪高き荒野かな

図書館に憩ふ人あり秋の風

水澄みて子の声のする橋の下

幼な子の母を呼ぶ声秋入日

線香の煙の澱む秋の暮

一人居る辺り一面秋の暮

暮早し座して見てゐる空の色

アルプスの向うに聳え雲の峰

百日紅いつもの道に咲きにけり

谷からの風に揺れたる藤袴

いつも行く道に芒の揺れてをり

水澄むや水際に鳥の影映り

虫の音やいつしか雨の止んでゐて

古寺へ行く道沿ひの曼殊沙華

望月や遠くを列車とほる音

摘んで来し無花果の手に重きこと

背戸山に栗落つる音聞こえけり

井藤希

栄吉

大畑恵

登校の子は小走りに花木權

とんぼうの増えゆく池へ夕日影

花芙蓉道にじゃんけん遊びの子

縁側に故郷の風や鉦叩

父と子の将棋指す音盆の夜

萩の花夜来の雨に枝垂れをり

石垣に影して通る秋の蝶

城跡を渡る素秋の風の音

鋏止めてしばらく見上げ秋の雲

曼珠沙華群れ咲く里に人を見ず

暁子

それぞれに鳴き声遠ふ残る蟬

杖を手に休めば蜻蛉寄りにけり

開け放つ生家の居間にやんま来る

夜半に降る秋雨の音聞いてをり

秋苗追へば次々増えにけり

二人だけの静かな山家月仰ぐ

夜の更けてつれさせよく聞こえたる

白萩の咲き初むる道歩きをり

萩の前車椅子より立ち上がる

隣人と見上げてゐたる秋の雲

すみれ

三段の脚立に上り桃を握ぐ

虫鳴いて一人待ちゐる子の帰り

子の届く塀に並ぶる花梨の実

月白や鴉の声の遠さかる

川端を走る人ある良夜かな

新聞のことりと届き朝の月

松手入上から鋏の音聞こえ

高枝に両足見ゆる松手入

動く影見つけてゐたり秋の水

駅を出て目の前の道初紅葉

知佳子

住職の道を掃きをり葛の花

母が家に棚田の稲穂見下ろせり

一枚の赤き稲穂の田んばかな

露草やデイサービスに母送る

稲刈りし道に沿うたる曼珠沙華

十五夜や子に誘はれて庭に出る

雲間から出る満月を待つてをり

十五夜や団地の人の集まりて

リビングの窓から月を見上げけり

母が家の真正面に今日の月

腕まくりワクチン接種いわし雲

縁側に座りて夫と月を待つ

雲かかる月も風情と夫の言ふ

板塀に映つてゐたる柿の影

どこからか迷ひて目籠に蟻蚋入る

リモコンを押しやり林檎剥いてをり

吹き込みし風に起きたる秋の朝

母の年どうに越したり星月夜

秋の灯や醬油の染みた落し蓋

秋の灯や姉の形見の指輪はめ

朝露の蓬を摘めば夜の明くる

登り道薊の前に足を止め

蔵草ぞうくさの茶を飲みながら話したる

仙人掌の花咲く頃は父想ふ

大の字になりて寝てをり帰省の子

久々に家族揃うて浅蜷汁

亡き父の愛でし花咲き盆の月

家事を終へ窓から眺む盆の月

太極拳終へて月夜の家路かな

しばらくは空を見てゐる九月かな

ちどり

友岡葉山子

雲雀

半夏生異国の館は雲近く

テーブルに先客のあり解夏の二時

アイスコーヒー雨のネオンのガラス

炎天を切る白球と保護者達

手ぬぐいとタンクトップが持つラムネ

前列の先輩チアガールの盛夏

球場の外片蔭の応援団

暑気中り多分見知らぬ者同士

蜜豆や弟が来て兄はまだ

石畳景月の楠に向かう

ふじ女

一人居の叔母を訪ねる虫の道

柚子坊の葉を食べ尽す命かな

鈴虫のよく鳴いてゐる叔母の家

はらからと枕並べて盆の家

盆の月踏石に置く父の下駄

蟪蛄の脱殻枝に足を掛け

自販機の下に鳴きたるちちろ虫

虫すだく空に降るほど星の出で

月光に照らされてゐるガスタンク

大いなる海を照らして望の月

松田裕子

星涼し島に波音聞いてをり

山百合を挿せば里の香してきたる

空の色翹に透かせて糸とんば

秋まつやづき雲の流れくる

野仏に一輪の花秋澄めり

秋澄むや画紙に広がる空と海

蠟燭の灯に著使ふ颱風禍

連れ添うて桜紅葉の中に居る

山寺の樹下に見上げて金鈴子

重陽や今を樂しむ余生なり

森口良樹

日矢射してひと日始まる初秋かな

八月の富士を眼下の旅路かな

榎松の森の匂うて霧の朝

山霧や熊除けの鈴遠ざかる

秋の川鷗が魚を啄みて

秋風や路面電車の駅に立ち

母の忌の母の無花果椀ぎにけり

比治山に三日月のぼる雨上り

平凡な暮らして今日の良夜かな

辻純江

畑に立つ足に流るる風涼し

無縁墓に線香分かつ墓参り

ひとところ筋雲流れ処暑の朝

笹濁りの池に木の橋昼の虫

潮入りの雁木を濡らし秋の波

水澄むや浅瀬に靴の跡つぎ

棧橋の秋の灯に船寄せにけり

早晩の空に見つけて秋北斗

画材にと一つ求むるラ・フランス

山野ウタ

朝刊を右手左は牽牛花

野の園に立ちて聞きけり虫時雨

思ふさま鳴けよこの木の法師蟬

店先にしばらく秋果見てゐたり

好物の林檎に笑ふ遺影かな

我去れば影も去りゆく盆の月

初めての紅をさす子や地藏盆

絶え間なく繙の葉揺らす秋の雨

村上理江

水晶の数珠用意して秋彼岸

忽然と参道に咲く曼珠沙華

秋灯のまばらな里や山深し

秋の夜や電池切れせる血圧計

心込め寺苑の掃除秋ひと日

花すすき振つて下校の子供かな

一本の芒を活けし花瓶かな

紀英子

庭園に新郎新婦いなし雲

シチュー煮る台風西へ進みをり

台風の名残りの風に出棺す

秋日濃し蜜吸ふ蝶を見てをりぬ

秋天を映す井戸より水を汲む

秋の雲流るるを見て電車待つ

景鶏頭雨まつすぐに降つてをり

桑門わかこ

子の家は廊下伝ひや夕涼し

鱗雲日輪傾く方へ伸び

まだ青き葉まで落として初嵐

台風が過ぎ去るまでの氣のそぞろ

家事終へてゆつくり栗を剥きにけり

花野行く友の緑り言聞きながら

高梨英子

鰯雲信子待ちに友と見て

夕暮の掠鳥の群けたたまし

月出でて幾度もカメラ構へたり

鳥の来て団栗落つる舗道かな

鶺鴒の鳴いて空へと響きけり

上島康子

枡の雲の転がり来たる広場かな

社より釘を打つ音空高し

駅に聴く街角ピアノ秋半ば

遠目にも白波の立つ能登の秋

手に取りて今朝は冷たき花鋏

熊谷ゆり子

犬の尾の先に届いて吾亦紅

灯台を打つ波しづき颱風来

台風や夫の帰れば風の止み

秋薔薇咲かせてゐたる角の家

散歩道水引草の足にふれ

美耶

亡き母の生絹の單衣手に取りぬ

空蟬の箱に入れしを地に返す

耳あてて聞く十五夜の氷琴窟

東に十六夜の月赤らみて

高嶋絹代

十六夜の月見て帰る負け試合

草むらに露草ひとつ咲きにけり

テーブルに庭の秋草飾りけり

秋の風袍一つで旅に出る

撫子

月の出を待つ足元に虫の声

川土手に赤と白との彼岸花

金木犀の香り広がる空の青

金川昭子

彼岸入り亡き母思ひ花を摘む

急坂に自転車押せば滲む汗

手を振れば学童笑ふ萩の道

河原静子

そろそろか庭に立待見に行かん

友の店シルバーウィークは休みます

蓮の実のからころからと鳴りにけり

民

栗飯を炊いてた母を思いだす

人恋しメールを送る秋の夜

阿波久

独り居のマンションにまた秋が来る

ベランダからスマホで月を写したる

みさ子

颱風の後はオレンジ色の空

思ひ立ち書類整理の秋の暮

山崎桂子

令和四年八月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

名を知らぬ木の実に上る夏の月	佐保光俊
夕立の気配のしたる大柳	村上正人
白南風は松から吹いて浮御堂	高尾ひとみ
万緑の山ゆく人の急がざる	井藤希
友の忌の遠くに鳴ける不如婦	大畑恵
百日紅こぼるるままに活けにけり	暁子
風呂場から遊ぶ子の声月涼し	すみれ
眠る子に上着をかけて村芝居	知佳子
風鈴のかそけき音に本を閉づ	松田裕子
少年と少女隔つるソーダ水	森口良樹

雲雀 私の選んだ十句

鮎川に沿うて近づく人の声	佐保光俊
蝸の声に山家の戸を開く	すみれ
小流れの水を汲んでは墓洗ふ	ちどり
帰省子にまづは大きな塩むすび	松田裕子
いつかまたこの地に立たむ流れ星	森口良樹
雨溜めて重たげに揺れ百日紅	山野ウタ
大蛸を掴みて友の夏見舞	高梨英子
米を研ぐ手を止め眺む処暑の雲	美耶
盆の月母屋の宴続きをり	撫子
盆の月深夜の窓に小さく見ゆ	河原静子